

アメリカと日本の社会的崩壊についての考察… 道徳的繋がり的重要性

ケビン・M・ドーク
(訳：山岡鉄秀)

分断社会が何を意味するのかについてのいくつかの考察から始めたいと思います。私はこのコロナウムのそなえてこの問題に様々な思索をめぐらせてきました。しかし、分断社会が何を意味しているのかについて、まだあまり良い考えを得られていません。それは、「分裂した社会」、「分離した社会」、または「崩壊した社会」を指すかもしれません。あるいは、「細分化された社会」あるいは「疎外された社会」さえも指すかもしれません。誰もが自分自身の経験や問題意識の文脈の中で分断社会を理解するための独自の方法を持つことになると思います。そしておそらく、コロナウムを通して統一された定義を確立しようとするべきではないでしょう。

現代日本においても分断社会に関する議論があり、井手英策

などによる本があることを承知しています。私はこの分野の文献の専門家ではありませんが、私の一般的な理解は、それは主に経済格差の拡大と縮小する中産階級を反映しているということです。これらの経済問題は、アメリカにおける社会的崩壊に関する議論の中心的话题でもあります。しかし、今日のアメリカの社会の変化を理解するには、単なる経済的事象よりももっと深く見る必要があると思います。アメリカ社会の崩壊に関する最も鋭い分析の一つが一九七〇年に日本のアメリカ事情通によつて出版されたことは興味深いことです。私は永井陽之助の「解体するアメリカ…危機の生態学」とそれを基にした「アメリカは崩壊している」という英語の記事を参照しています。永井のエッセイは予言的で、ほとんど無視されました。彼はアメ

リカが危機に瀕しているを見ました。「安定した多数派、その支配階級、そしてその権威」を失ったからです。本質的にアメリカは、アメリカの自由主義と個人主義の有害な影響のために危機に瀕して、ました。Patrick Deneenの二〇一八年の著書『自由主義が失敗した理由』と不気味に類似した議論で、永井は「急速な都市化と人口移動、繁栄と豊かさ」がアメリカの社会崩壊の原因であると主張しました。永井の説明には力がありました。アメリカを引き裂いたこれらの遠心力の理由の分析にはそれほど強くはありませんでした。公平を期せば、彼の主な目標は発展のためのガイドとしてアメリカに過度に依存しないよう、日本国民に警告することでした。

今日の分断社会の根本的な原因にたどり着くためには、社会とは何かについてのより深い理解で永井の説明を補足する必要があります。 「社会」それ自体とは何か？ そして社会をつなぎとめるものは何か？ が明確でない場合、なぜ社会が崩壊しているように見えるのかを理解することはできません。「社会」とはさまざまなことを意味し得ます。伝統的に、社会理論家はフェルディナンド・テンニエスのゲマインシャフトとしての社会とゲゼルシャフトとしての社会の峻別を使用してきました。田中耕太郎はそのような社会理論家の一人でしたが、今日の社会がバラバラになっている理由を理解するのに役立つ一定の明確さを加えたと私は思います。田中はゲマインシャフトを「結

合の為の結合又は愛着の結合」に基づく社会、ゲゼルシャフトは「利益の為の結合又は利益の結合」に基づく社会と説明します。私の話の残りの部分では、このゲマインシャフト社会モデルに専念したいと思います。それが私たちが本場に問題にしているものだと思うからです。それは、国内社会や地域社会（「コミュニティ」としても知られている）さえも瓦解しているという問題です。田中は、特にグローバル社会、さらにはグローバル法を理解するために、ゲゼルシャフトモデルを使用しています。今日の限られた時間の中でそのトピックを追及することはできません。しかし、今日の分断社会現象がこれら二つのタイプの社会の間の混乱、それらの概念的境界の崩壊の結果であるかどうかは、別の機会に取り上げたいトピックです。少なくともここでその問題を提起する価値はあるでしょう。

分断社会の問題を理解するために田中がゲマインシャフト社会について挙げるキーポイントはこうです。「結合の為の結合」に基づく社会は、常にある種の集団に属する人間の基本的な社会的性質を反映したものに過ぎない。したがって、そのような社会では「倫理的要素が基調をなすものである」。田中はさらにこう言います。「この種の社会に於いては個人と団体との間の関係が単に利害打算的ではなく、個人が団体に奉仕する犠牲的感情が存する故に、この種の社会は、犠牲社会となり得る」。田中は、地域社会に対する人間のニーズと自由に対する人間の

ニーズの両方が、一方では犠牲と愛に基づく地域社会と、他方では合理的自己利益に基づくグローバル社会との二重システムによってバランスが取られると考えました。一九三〇年代の問題は、グローバル社会の弱さと人種、民族そして国家への過度に強い愛着でした。彼はよりローカルなレベルでコミュニティの正当な必要性を否定することなく、世界法の理論を通してこの不均衡を是正するために努力しました。

今日、状況は変わりました。グローバリズムは、経済的にも文化的にも、強固な地域社会やコミュニティでかつて人々を束ねていた結びつきを弱体化させているようです。そしてそれは主に、他者のための犠牲の倫理を弱める道徳的相対主義の原則を強めることによってなされたようです。すべての道徳が相対的なものであれば、個人は、地域社会の他の人々のニーズではなく、個人の利益に役立つと考えられる倫理原則を自由に選択できます。ラッセル・ヒッティンジャーは、「三つの必要な社会」に関する最近の記事の中で、道徳的相対主義が社会の安定性をいかに損なうかを明らかにしました。ヒッティンジャーは一九世紀に教皇ピオ九世が人間の幸せのために必要な三つの社会があると主張したことを私達に思い出させました：(一) 対内社会（結婚や家族）；(二) 政治的社会（国家）；(三) そして社会としての教会。そして教皇は、私たちはこれらの社会を選ぶのではなく、私たちはそれらの中に居住している（存在す

る）ことを強調しました。

私たち人間は、社会的で政治的でそして教会に属する動物で、私たちの道徳的完全性は、私たちがこれらの永続的な社会に正しく住むかどうかにかかっているのです。しかし、今日私たちのうち何人がその考えを受け入れるでしょうか？ 多くはないと私は恐れています。実際、分断社会の問題の起源は、ヒッティンジャーが特定している、ある現代的傾向に見出すことができます。今日、私たちは、政治、結婚、そして教会を単なる選択的なものとして想像しがちです。私たちが人生を生き、世代を超えて完璧を達成するための規範的で形成的な制度ではなく、私たちが自分で選んだ人生を生きるために使うことができる道具のようなものでしかありません。否定的な人類学は、人間の幸福の三つの大きな制度を人間性の完成のためではなく、自己修正のためのプラットフォームとして解釈します。グローバリズムによって私たちの多くは伝統的権威に疑問を投げかけ、私たちが生まれてきたこれらの三つの社会（家族、教会、国家）が私たちに對して何らかの主張をしているという考えを拒絶したと言っても過言ではないでしょう。むしろ、個人主義と個人の選択は、私たちにとって許容すべき、客観的により良い社会的または道徳的システムがあるという考えよりも優先されます。

現代横行している個人主義と自由主義は社会的連帯を弱体化

させながら、社会の安定自体も蝕んでいます。これが一つの国でどのように起こったのか、社会理論から現代アメリカにおける分断社会に関する最近の実証的研究に移ることによって説明しましょう。ティモシー・カーニーが今年、『疎外されたアメリカ…なぜある場所は繁栄し他の場所は崩壊するのか?』という重要な本を出版しました(HarperCollins, 2019)。カーニーは、ワシントンDCの裕福な郊外からソルトレイクシティまで、ペンシルベニアの錆ついた町からアイオワ州、ウイスコンシン州、バージニア州などの小さな町まで、アメリカ中の多様なコミュニティで時間を過ごしました。彼が見つけたのは、裕福な共同体(主に二つの海岸線)の外には、人々がアメリカン・ドリームは死んだと信じ、人々が疎外されている広大な地域があるということでした。疎外とは、カーニーによれば「社会的秩序を遠く離れた、理解できない、または詐欺的に見える心の状態」を意味します。しかし、他に彼が見つけたものは非常に魅力的です。メリーランド州チェビースのような裕福な共同体の住人が疎外されずに活気に満ちた共同体生活を送っていることを知って驚く人はほとんどいないでしょう。しかし、ウイスコンシン州のウーストバークのようないくつかの小さな町にも活気のある地域生活があると知れば多くの人が驚くことでしょう。カーニーが見つけたことは、豊かさを良い生活の前提とするグローバリズムと個人主義の信念と矛盾します。

カーニーは、結局のところ、教会の重要な役割を発見しました。まず第一に、彼は様々な宗教団体のアメリカ人が宗教行事に参加するのをやめ、アメリカで世俗化が進んでいることを示す研究をまとめています。しかし、分断社会の鍵はこの点です。「特に労働者階級の中で、宗教から離れたアメリカ人は、宗教との関係を維持しているアメリカ人よりもうまくいっていない。そして世俗化は国全体に害を及ぼしている」。カーニーは、離婚、家族崩壊、薬物とアルコールの問題、自殺率、その他の社会病理に関する統計を引用し、これらの問題は通常の宗教行事に参加していない人々の間でより深刻で、参加している人々の間ではそれほどでもないことを示しています。そしてそれはキリスト教徒だけの傾向ではありません。彼は、宗教的参加と社会的および個人的な幸福との間の相関関係が、イスラム教徒および他の非キリスト教の信者にも当てはまることを示しています。多くの世俗主義者や他の人々を驚かせることは、最も重要なのは個人の宗教的信念ではないということです。重要なことは組織された宗教団体に属し、積極的に参加しているかどうかだったのです。宗教生活が形を失うと、家庭生活や経済生活も形を失う傾向があります。そしてこのプロセスが進行するにつれて、私たちは分断社会として知られる社会に到達します。人々は社会的ネットワークに参加するのをやめて自分自身の中に撤退します。よく知られている引きこもりとい

う日本での現象と関係性を見出せるでしょうか？ この二つを簡単に結び付ける前に、私たちはもう少し考える必要があります。しかし、疑問を持つことに害はありません。

カーニーは、彼の証拠はアレクシス・ド・トクビルが二〇〇年近く前に書いたアメリカの背景でしか語れないと信じています。「宗教が（アメリカの）第一の政治制度だとみなされるべきだ」と。彼はまた彼の結論を公の礼拝のために週に一日集まる伝統を持つアブラハムの信仰（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教）に限定しています。しかし時々彼はまたこの問題で普遍的な何かを認識しています。「家族、信仰、そして共同体」は……その三つすべてが相互に強化される原因と結果の両方として理解されなければならないほど、人間性において絡み合っているのだと。はたして、カーニーの社会分析に対する制度的アプローチの中には隠された普遍的な要素があり、それが日本社会のように、アブラハムの信仰も週一回の礼拝も存在しない社会に適用されうる可能性があるでしょうか？

この点において、私たちはカーニーのカトリック信仰を共有しながらも、日本社会の希望と問題を深く知っていた田中耕太郎に戻る必要があると思います。「共通の理由と目的で人々を結びつける力は連帯である」というカーニーの主張を考えてみましょう。まさにこの連帯と呼ばれるものは何でしょうか？ カーニーは教皇ヨハネ・パウロ二世を引用します。教皇は言い

ました。「連帯とは、公益に尽力するという固い決意です。それはすなわち、すべての人のためになる、ということ、私たちはそのことに責任を負っているのです」。それはすべて理解できることです。しかし、個人はいかにして自分が他の人に対して責任があるという認識に到達するのでしょうか。カーニーは、教会を定期的に訪れることによって、この責任感が自然に人々の良心に芽生えると考えているようです。毎週教会に向かう習慣をほとんど欠いている日本のような社会にはどんな希望があるのでしょうか？ 単一民族ということは、初めて会った人を世話し、犠牲を払うのに十分な動機であると確信できるでしょうか？

田中は民族的アイデンティティの価値を認めていました。しかし彼は、社会的絆を定義するにあたって、より密接に結びついたゲマインシャフト社会の中でさえも、民族的アイデンティティだけを理由にしなかったことに注意してください。むしろ、彼はこれらの社会で人々を結びつける力の基本的な要素は倫理的なものであると信じました。そして彼は自分にとって倫理とは何を意味するのかという点で、アブラハムの信仰の実践に限定されず、自分のカトリックの信仰にも限定されない、道徳的概念についてより具体的なものを提供しました。この倫理観は、個人がグループの利益のために自分の利益を犠牲にするという普遍的な能力に根ざしていました。田中は間違いなく、

より大きな政治的・目的のために個人を搾取する一種の全体主義を要求してはいませんでした。この「犠牲的な感覚」はキリスト教に特有のものではありませんでした。それは合理的で自己利益的なものでさえありました。それは、私たち全員がコミュニケーションを形成してのみ繁栄することができるという認識、私たちは他者との関係においてのみ、幸せ、人間としての完璧さを見つけることができるという認識から生じています。要するに、彼はあらゆるタイプの社会的関係が、自ら進んで妥協し、時には自身の利益を他者の利益のために犠牲にする意志を必要とすることを知っていました。

カーニーがアメリカの公益への倫理的なコミットメントの低下に注目したのは確かに正解でした、そして低下の度合いが宗教的な共同体への参加を避ける人々の間でより急激であるという点において疑いようもなく正しかったのです。しかし、分断社会が日本の問題でもあるとすれば、少なくとも現時点では、アメリカよりはまだまだましではないかと私は思います。なぜでしょうか？ 教会のメンバーになるといって文化がなくても、日本人は公益に対して犠牲を払うという倫理感をアメリカ人よりも少し良く保っているように思えるからです。グローバリゼーションと中央集権化された国家が、隣人に対して倫理的にふるまう日本の古い文化を完全に置き換えることができなかつたためであろうと私は思います。それでも、この伝統的な道徳文化

が、日本でますます危険にさらされていることは確かでしょう。確かに、米国の占領は神道に対する解毒剤として世俗化を促進し、道徳的な衰退に多大な貢献をしました。個人主義は戦時体制からの解放として絶賛されましたが、その個人主義が社会的絆を弱めるという意図しない結果をもたらしました。最近数十年の繁栄もまた、利己主義と消費主義を奨励することによって貢献しています。まとめると、日本におけるこの忍び寄る分断社会への唯一の効果的な対抗策は、一九三〇年代に田中が日本の伝統的で健全な社会的結束と連帯を維持するための鍵として認識した犠牲の倫理的価値の見直しであると思います。

しかし、教会に通う文化がない中で、そのような倫理システムをどのように設定するのでしょうか。唯一の解決策は学校で倫理教育を再導入することだと思います。大日本帝国の倫理教育（修身）は、戦争のためのイデオロギーに過ぎないとして多くの人から批判されてきました。しかし、それが悪い目的のために利用され得るという理由だけで倫理教育を拒否するのは不公平だと思います。今日、戦後の日本で倫理教育を廃止したことによるコストは、戦時中の日本に対する悪影響を凌駕しているように見えます。実際、倫理教育を廃止したことの「利点」の一つは、現代日本で社会が分断される傾向の根底にある極端な個人主義と道徳的無関心です。今日日本で必要とされているのは、若者に道徳的繋がりを与える倫理教育です。私はその表

現で意味するのは、田中が社会的結合を維持する接着剤とみなした、隣人に対するある種の倫理的気配りです。それは狭すぎる（例えば日本の特殊な倫理）ものでもなければ、抽象的なグローバルイズムの理念をいたずらにほめそやす、日本の学校の道徳クラスで行われている「道徳教育」の類でもないはず。私は自然法に由来し、具体的な社会環境に適用される倫理原則を考えています。それはまさに田中が抱いていたものです。しかしそれは、日本の公立学校で具体的に普遍的な（グローバルイズムではない）倫理教育を推進する戦いに挑むために、日本の成人にとっても道徳的繋がりが必要であることを意味しているのです。

